

翻刻・聯玉集(乾・坤)

附・能順交遊人名索引(稿)

棚町知彌

要旨 本誌11号に発表した「能順伝資料」の

その五 加能連歌壇史叢草・その二(前)

ならびに、金子金治郎編『連歌研究の展開』所収の

その六 能順時代人の連歌史観・参考資料

の両稿を承けて、「その七」として、能順一代の発句集『聯玉集』を翻刻紹介する。本集は古く『北野誌』(明治43年7月、北野神社刊)人の巻のなかに「北野文叢卷九拾五 雑文部 梅のしづく 順師発句」により翻刻されているが、能順伝の最も基本的な資料であるので、小松天満宮伝来の版本乾・坤二冊により、句頭に一連番号を附して翻刻する。

なお、本集中所出の人名については、既発表他資料についての検索をも兼ねた索引を作成し、巻末に収めて解題にかえる。能順年譜にまとまるまでには、前11号の統稿「加能連歌壇史叢草・その二(後)」を、明年の13号にと予定している。また、本書出版に関する参考資料としては、旧稿の「能順伝資料・その二(預坊時代・前)・「同」・その三(預坊時代・後)」(「有明高専紀要」11・12号、昭50・1月、昭51・1月)、を参照されたい。

△表紙▽

聯 玉 集 乾 (書題箋)

今はむかし 観明軒法橋能順は 其先代くつきて梅
をめて給ふ

「(表紙)

御神につかへまつりて 連歌を嗜り 中につきて能順
は 応仁文明の比よりこのかたの名たゝるかぎりにも
おさく立をくれす 流に遡て源にかへるものか 其
根洛北に培て」(二オ) 其花四方にかうはし かけまく
もかしこき

上皇のみことのりをうけてたてまつりて かれこれの
句あまたきこえあけ 叡慮にかなふあまり 寿算をあ
はれませ給ふて 繭のわたをよひからの硯給りしより
名いよく高し 人を教るかたのいつくしみ深く」
(二ウ)木をはめる虫の是字非字を知ぬ類ひまで 上下の
句を分つきつゝ 爰かしこ添けつりて 磨男か手に瓦

石をとれるかことし 爰に廿とせあまりのさきより

我聞集るかきりの発句を梓にちりはめて なかき世の
かた見になさむとす もれたるもおほかるへく ほく
ゆかめ」(二オ) て聞伝へたるもあまたあるへし 後人
の志おなしきか潤色せむ事をねかふのみ 岨宝永の丁
亥のとし水無月廿余日 加州小松歎生謹誌」(二ウ)

連歌発句 春部

元 日

- 1 晴る日や天の御影の国の春
- 2 去年今年枝分て立や花の春
- 3 今朝は世のはれに出たる春日哉
- 4 三吉野の花の春立白根かな
- 5 春遅し年の明仄うす霞
- 6 されは此はなうくひすよけふの春

「三オ

7 おもひ出のけふにやはあらぬ老の春

元日立春の心を

8 神の代の道や年立けふのはる

9 若ゆてふ今朝こそ身をも忘水

10 命也嬉しき世にもけふのはる

11 身こそあれ心な古そはなの春

12 守らすはあはましけふか神の春

13 けふよりや思ひ初るを花のはる

14 老をこそ思ふ事には今日のはる

15 しのゝめに見るや来る方春霞

16 春の日のいてそよ更に朝かすみ

17 花鳥にこゝろつく日のはしめ哉

七十になれる年

18 身にそ思ふ年にまれなるけふの春

19 梅か香や此神風の今朝の春

20 道しあれは立るや万四方のはる

21 此国や光和く日のはしめ

従

仙洞恩賜の硯の心を

22 今朝知や筆の海より春の水

23 今朝立や誰まことより神の春

冥加にかなふ事あまた有ける後

北野の社の預りをゆつり退て

24 思ふ事何かみやこのはなの春

25 身の春はさもあらはあれ百千鳥

26 今朝こゝろ静に広し四方のはる

27 咲やこの花をし見れば今朝の春

梅

28 守りけり神風にほふ梅のはな

29 梅に匂ひ松に木深し神慮

30 梅か香は目に見えぬ神の信哉

31 四方の色や霞にこもる窓の梅

32 薄雪や梅にゝほへる朝かすみ

33 梅か香や嵐のうちの薄霞

34 梅か香は雲井の風の立枝哉

「四オ

「三ッ

「四ウ

「五オ

小松にての千句巻頭

- 35 色よ香よ心かなふ宿の梅
- 36 色よ香よかゝれは栽し宿の梅
- 37 色は香にとられて白し梅花
- 38 梅か香のしきりて風は音もなし
- 39 夕闇やにほひにむかふ宿のうめ
- 40 梅か香は嬉しき風のたよりかな
- 41 うくひすも梅咲竹の籬かな
- 42 梅にほひ雪ちる袖の若菜哉
- 43 梅か香の若菜に匂ふ袂かな
- 44 梅散て草かうはしき垣ね哉
- 45 雪深し梅一本の春の庭
- 46 奥深し松に梅さく木々の庭
- 47 梅か香は柳かえたの戦かな
- 48 立枝こそあるしの心宿のうめ
- 49 風をよひうそふく梅のにほひかな

聖廟八百年御忌ニ従

綱紀公御手向の万句巻頭御作代

- 50 此神の守手向や梅のはな
「六ウ
- 51 梅か香や世々の松風神の庭
「五ウ
- 52 梅か香やあふけは天津春の風
本多政敏朝臣の許にて
- 53 おほけなし袖なにほひそ梅花
野村重威にて梅竹月影たる硯ニ
- 54 竹戦梅かほる夜や窓の月
「七オ
- 55 梅か香は寐なん空なき月夜かな
- 56 うめかゝや手枕疎し夜はの月
- 57 雪にうめ咲出る庭や星月夜
- 58 梅に匂ひ月に霞めるゆふへかな
松梅の絵の文台開 歎生許にて
- 59 色そふや梅松か枝の手向種
竹田忠張「世に匂へ我ならてたに窓の梅」
「七ウ
- 60 消にけり梅を残して春の雪

金沢はる悼に

61 有世にも見しや此はなたむけ種

懷旧

62 めくり来ぬ春やむかしの宿の梅

霞

63 松風やいま一しほの朝かすみ

64 川橋は風のかけたる霞かな

65 夕霞音になりけり夜の雨

66 雪薄くかすみ深むる外山哉

彦山甘景の発句を山座主勸

進せられし第一牛王靈廟といふ題ニ

67 仰け山高天の原の雲かすみ

墨吉のうみへにして

68 すみよしや霞はかりも海辺哉

水無瀬にして

69 嶺や雪麓や霞みみなせ河

残雪

70 白山はきえての名なり越の雪

71 雪は世にきえていよ／＼高根哉

台麓にて

72 猶残る雪をおもへは高ね哉

73 山の端や東雲まかふはるの雪

74 遠山の雪まやまさる瀬々のこゑ

75 山は雪みとりに霞む野原哉

白根を見て

76 今一重雪もかすみの高根哉

77 遠近の雪やむら山むら霞

旅行の比

78 雪に越て更にも春の山路哉

79 見せはやを野山に残す雪の庭

80 散を見んけなはけなむ春の雪

81 草に木に露こそたまれ春の雪

82 むら消にたてるや雪の小松原

83 白きより色とる雪のかすみ哉

「八ウ

「八オ

「九オ

「九ウ

84 昨日摘跡は若菜の雪ま哉

85 鳥の音の雪に解ゆく朝日かな

86 草青く雪むらきえて春野哉

淀のわたりにて

87 四方の雪春行水の淀もなし

「十オ

鶯

88 うくひすも堪すや今朝の朝霞

89 うくひすの音は笛竹の籬かな

90 うくひすやよをほのめかす窓の竹

91 うくひすの歌のつたへや鳥の跡

92 うくひすの声や野山の春の宿

93 うくひすの鳴てとむる山路かな

「十ウ

94 うくひすの隙もとめ来る夜床哉

95 うくひすの雪をこほせる羽風哉

柳

96 露に今朝風はおさまる柳かな

97 青柳よ風にしらすな今朝の露

98 花さかは風の青柳色もなし

99 風露に思ひみたるゝ柳かな

100 淡雪や柳のいとのかた結び

101 薄雪に見るゝ露の柳かな

「十二オ

102 風露のみたれいとなき柳かな

103 白露の色に枝かす柳かな

104 青柳に吹すは春の風もなし

105 枝ななき柳は歌のなかめかな

106 しら露の枝うつりする柳かな

餞別とて小松に汁会せしに

107 道のへの帰るさ結ふ柳かな

108 うくひすの枝と成ぬる柳かな

「十二ウ

109 鶯のねよけに見ゆる柳かな

110 白鳥のえたや氷し玉柳

111 風や見ん露やおしまん糸柳

寺西秀右月次催し給ふ会始ニ

112 言の葉の枝の風ふく柳かな

春 草

「十二オ

旅行の人のもとへ

113 霜に枯雪に萌出る草葉哉

124 旅を思ふ雁のこゝろも春の空

114 若草にとめける露のこゝろ哉

越路へ行人のもとへ

115 若草の花さへ咲て春野哉

125 雁を行いかにゆかしき越の春

116 しら露やみとりすくろの村薄

117 しら露の角くみ出るすゝきかな

春 月

118 下もえは何の根さしものふ草

126 月の色に山たち出るかすみかな

於難波

「十三ウ

119 見るかうちに芦の角くむ汐干哉

127 月にして見るへかりけるかすみ哉

孫むすめうしなひし時

128 春の月さしてにこらぬ水もなし

120 わか草の露なかりそ老の袖

129 春の月くもるをいはん空もなし
湖海のほとりにて

帰 雁

130 夕霞月もほてるうみへ哉

121 古郷も花ならぬ何かかへる雁

131 薄雪のちりかひくもれ春の月

於帰山

132 薄曇雪も猶ちれ春の月

122 雁もいま有とや爰にかへる山

133 雪ちりておほる月夜の雲井哉

於難波

「十三オ

134 はるは月ふらぬ雨夜の光かな

123 難波かた何をこゝろに帰雁

135 氷より月も出けりはるの水

136 さ夜中にしらめる空や春の月

136 さ夜中にしらめる空や春の月

「十四オ

「十三ウ

難波わたりにて

137 難波江やかすまぬ波も夕月夜

高野山にて

138 月そすむ霞のうへの高野山

139 山の端に猶晨明や去年の雪

政右・直忠三唸

140 有明は夜なく霞む行衛かな

141 おほる夜を先三日月の雲井かな

花

142 夜の雨や花のあさ露朝霞

143 花の色にかくろひ行か今朝の月

144 其葉さへ神はまもれり花の宿

天神遷宮ニ

145 花清しうつりますらむ神慮

神 供

146 神も此ぬさはみそなへ花のえた

147 咲花も春のもとたつあつま哉

148 なくさむや待こゝろさへはなの宿

149 花盛かすみも風もにほひかな

150 目うつしも花よりはなの盛かな

151 急け花遠さかり行みねの雪

152 色見せよ花を養ふ窓の雨

153 うるはしく雨やかしつく花の露

154 色見えぬにほひは花のこゝろかな

155 花ちかき風のにほへる木まかな

156 思ひしも此一本そはなざかり

157 底みえて水景清しはなの色

158 けふ来すは花も思はん色香かな

元禄十五年二月十五日 たれかれに

仙洞御法楽の連歌百韻つかふまつれと

勅定の時 発句

159 広前の手向は花の千枝哉

160 みるのみに心は花の色もなし

161 花にいま霞吹きる風もなし

162 いつ見きと思ひし花の陰もなし

十六オ

十五ウ

163 青柳の花の友待みきりかな

「十六ウ

金沢にて十花の千句巻頭

173 盛あれば花や下草庭の松

柴屋の文台開ニ

164 待甲斐の有世なりけり春の花

174 はなのなかめしはのや残る木陰哉

前田知頼の許にて祇公筆跡開ニ

小松養福院祐尚興行

165 月光の情や残る筆の跡

175 夕くれの花の所や寺の庭

花を待比 南山にむかへる家にて

176 花の色は散に尽せるゆふへ哉

166 花を先おもふみなみの高根かな

177 明日は花猶有とものゆふへ哉

庭前のはなを見て

178 散行もまたれし花のころかな

167 遠山に咲やしら雲花の庭

「十七オ

179 散はなや又山風の一さかり

168 花清し露もかうはし春の雨

180 花の色は夕栄久し春のあめ

169 知人を花もまちける色香哉

181 花の色は人のころのかきり哉

祇公御影開ニ

182 花に行はなに帰りて山もなし

170 言の葉に匂へる花や世々の春

七十の賀の会ニ

万日念仏の座にて

183 後たのめ花や見んもし老のはる

171 花に人むかへもらさぬ色香かな

184 風の色にうつろふはなのゆふへかな

千句之内

土方雄忠の庭の高楼にのほりて

172 年に待日に待はなの若木かな

「十七ウ

185 爰に見よ四方の山窓はなさかり

庭に松植ける人の許にて

玉泉寺南桂上人の隠居にて

「十八ウ

「十八オ

- 186 行とまる宿や彼国のはなの本
 187 家土産に四方のはな散朝かな
 188 花に鳥しら雪こほす羽風哉
 餞別の会ニ
 189 旅ころもたちうき花のなさけ哉
 都を出る比
 190 爰もおし行むかしこも花の時
 191 花の香にこゝろときめく夜床哉
 192 花毎に嫉まんなのはの色香かな
 柴屋の文台開ニ
 193 折床しなかめしはやはのはるの花
 194 花に月光をちらす木の間かな
 195 花に月ちりかひくもる木のまかな
 松原一息の許にて祇公筆蹟開
 196 言の葉のはなに残れるむかし哉
 197 人の為はなはうへまし老のはる
 198 身をよせよいはし花も老の陰
 199 身をすれば馴見ん花の陰もなし
 200 花見れば色めく老のこゝろ哉
 瓶にさしぬる花の散行を見て
 201 露の身を残せるはなのわかれ哉
 又
 202 詠めつゝ身をしるはなの名残かな
 203 うつろひて残れるはなや老の友
 204 花しあれば逢んかならず後のはる
 京都大森好澄くたりけるにあひて
 205 いかに花袖の香床しみやこ人
 井上長貞幸にあひて上洛せしに
 206 幸にあひあふはなのみやかかな
 於清水寺
 207 滝の音は花に落来て水もなし
 於祇園
 208 花のいろむへなる神の園生哉
 於智恩院

聯玉集

209 たのしみを極る花の盛かな
「二十一オ

大井川にて

210 いかた土や花に棹さす大井河

嵐山にして

211 あらし山よしや吉野の花盛

春日山にして

212 散はなや風のまに／＼たむけ山

三輪にして

213 花や今杉のむら立三輪の山
「二十一ウ

泊瀬にして

214 花のいろは尾上のかねのゆふへ哉

吉野山にて

215 花に来て行や雲井路よし野山

又

216 世に散や吉野のはなの山おろし

板津直景のもとへ悼ニ

217 風のうへの哀れはかなし花の露
「二十二オ

阿部正勝悼ニ

218 散残る別れうらめし花の友

あねの尼に成有けるにおくれて

219 身や今年残れる枝の花の露

老後七十九 七月廿九日 歎生方へ罷て

祇公独吟の発句「かきりさへ似たる花なき桜哉」

此句をおもひ出て 忌日なれば手向侍る

220 言の葉の花には似たるはなもなし
「二十二ウ

小松誓円寺にて月次の連歌会始

221 言の葉のはなのたねまけ園の春

222 行春に見えむころのはなもかな

223 詠居て花に身を知られかな

桜

224 咲て今さらなる春やはつ桜

225 見すもあらず見もせぬ花や初桜

226 松栢の庭や深山のはつさくら
「二十三オ

227 花の中にはな咲出るさくらかな

228 いとゆふの色にみたるさくらかな

- 229 桜いろの風青みゆく木すゑ哉
- 230 木の本に世を尽さはや山桜
- 231 尋ね来る心を太山さくら哉
- 232 花といへは先おもはるゝさくら哉
- 233 雪ならは庭や遠山はつさくら
- 234 せき入て庭や山水山さくら
山里人のもとにて
「二十三ウ」
- 235 爰にさくこゝろや深き山さくら
にし山の花見に出し人の許へ
- 236 山土産を頼むや老のさくら駈
- 237 桜かり木伝ひくらす山路かな
- 238 折袖や四方に散ゆく山さくら
都へのほる餞別に飲生と両吟
「二十四オ」
- 239 花毎におもひ出すへきさくらかな
- 240 奥深き春や八重山さくら哉
- 241 まち初る心の奥や八重桜
- 242 咲おもれ枝は折とも八重桜
神前にて
- 243 懸初て心の注連や八重桜
- 244 咲にけり花にも花の八重桜
- 245 夕露や重きかうへの八重さくら
- 246 またれしや残るも久し八重桜
或人の女の許より 花の枝に
「君かため手折し枝や桜花」
「二十四ウ」
- 247 折袖の色香や添て八重さくら
といふ句を添ていたりし返しニ
越前婦山にて
- 248 共に春いささくらとや婦山
嵐山にして
- 249 山桜吹やあらしの麓川
めてくらせ明日は嵐の山桜
「二十五オ」
- 250 音無の滝にて
- 251 しら波の音なしの滝や糸桜
- 252 こきませて咲や柳の糸桜
- 253 誰かいはん花に染たる糸さくら
- 254 おしめ風錦はつるゝいとさくら

聯玉集

255 色ふし(つよ)のかきりなりけりいと桜

難波津にて

「二十五ウ

256 難波津にさくや生駒の山さくら

奥村有輝の許へ召れし時

加州執柄の家にてまします心を

257 陰高し四方のかさしの家桜

外に見ぬ色やおしへし家さくら

258 栽なすや爰を深山の家さくら

259 名所の有ともいはゝ家さくら

260 行衛見んやとるか爰に家さくら

桜を手折来て 瓶にさし置て

人の発句せよといへりければ

261 山土産やかさしにさして家桜

土方雄忠の四十の賀の会ニ

262 ゆくゑ見んはつ花の賀の家桜

山崎長質の新宅の会

263 行すゑをかねてそうへし家桜

山寺にして

「二十六ウ

265 世離て咲や山寺遅さくら

年経て都にのほり 旧友にあひて

266 遅さくらあひみる老のいのち哉

267 問人のこゝろ知きや遅さくら

268 散にけり問来る人の遅桜

269 遅さくら嬉しき春の名残哉

楊貴妃といへる名の桜植ける宿にて

270 木々の中に色は独のさくら哉

三月卅日 小松山王の祠官

章重か許にて会せしに

271 行やけふいささくらとて春の風

藤

272 にはへ藤色は木の間の夕月夜

273 春の色は藤山ふきをかきり哉

274 藤波の越るや春のすゑの松

275 ゆく春をまちそまたれそ藤花

「二十七ウ

山吹

276 山吹やけに八重くの春の花
277 山吹の八重墻造るかすみかな
278 うつし植て庭や山吹若楸

暮春

279 行はるに見えむ心の色もかな
280 年は猶春こそ待し春のくれ

京都にて田舎人の興行ニ
281 行名残みやこ思はん春もかな

板津検校正的の悼ニ

282 おしむへき春をおくらす別哉

雑

283 春は世を袖にはこくむ霞かな

本多政長朝臣の七十に成給ふ

年の賀に鳩の杖に添奉りて

284 千とせをも経よ七かへり老のはる

横山氏従の七十の賀に

285 まれに猶あひ見よ松の老のはる
六十の賀しける人のもとへ

286 実永し祝ん日なり老の春

287 雨晴てゆふへを返す春日哉

288 花の中にけふ花咲り園の桃

289 花柳これや巳日の秋くさ

玉津嶋にて

290 わたつみの春のかさしや玉つしま

291 雨は今朝みとりに春の野山哉

時うしなひ給ふける人の許にて

292 春来ては本の水行こほりかな

293 いとゆふの空に声ある雲雀哉

悼人のもとへ

294 春の夜の夢にみなせる憂世かな

野村重威の許にて 和歌の浦を

蒔絵にしける文台ひらきニ

295 春なれや緑も和歌の浦の松

二十八ウ

二十八オ

二十九オ

二十九ウ

三十オ

夏部

「三十ウ

年経て京より帰来しニ

瑞順興行

307 帰り来て見れば茂れり宿の松

一周忌

308 去年見しや木間に茂るうない松

新樹

296 花深き風は若葉のほひ哉

297 春秋の色を若葉の木すゑ哉

298 うへし世の根さし木ふかき若葉哉

299 露落て色はかかぬ若葉哉

300 こと／＼にはへる花のわか葉哉

花の比障事有て 卯月に問来て

「三十一オ

若楓

309 夕暮の秋やあさ露若楓

310 染ぬとて唯をく露かわか楓

311 たをやかに露そかゝれる若楓

若き人の連歌執心の会ニ

「三十二オ

301 花の時来さりし宿はわか葉哉

302 水流れきよき若葉の茂り哉

303 松はこれ神代あらはす茂り哉

304 遠山を茂り残せる木間かな

305 やはらかにぬるや若葉のあさ柏

茶湯□まかりて

306 山里に庭の草木の茂かな

「三十一ウ

卯花

313 うの花は寒からぬ雪の山路哉

314 うのはなや春見し雪の墻根水

懐旧の人の許へ

315 ぬれて摘袖やあなうの花の露

「三十二ウ

郭公

316 おもひ入山路はしるや郭公

317 一声やいひしにかなふ子規

318 秋ならぬ夕もあやし子規

319 雨にけふ問すはいつのほととぎす

320 いたつらに雨な過しそ郭公

政右と両吟

321 頃日や誰言種もほととぎす

322 むら雨のふりはへてなけ時鳥

323 しのひ音や忍へとてしもほととぎす

北野松梅院尚禅興行

324 杜鵑名乗木高し宿の松

325 時鳥きゝしに似たるこゑもなし

山里人のもとへ

326 山里の伝たに嬉しほととぎす

327 わかてなけ卯月五月もほととぎす

328 待えしは契有けりほととぎす

内のおほいまうちきみ詞談して(同候カ)

和漢の発句仕れと有ければ

329 杜宇折に櫛の雲井かな

330 大かたの雲井も床しほととぎす

331 またて只聞へき物かほととぎす

332 卯月の比 大比叡にのほりて

333 反魂音を雲井の高根かな

334 反魂はつねや雲井夕月夜

伊勢にて

335 言やめよ草のかきはもほととぎす

336 夕月夜覚束なしやほととぎす

於小倉山

337 夕月夜をくらの山かほととぎす

338 山を出は月におくるなほととぎす

339 有明の光やはつねほととぎす

340 有明や思ひ馴にしほととぎす

341 いたつらにいく夜明しつ時鳥

342 おもふ事いつち寐覚の時鳥

343 子規老のさちなるの寐覚哉

「三十三」

「三十三」

「三十四」

「三十四」

- 354 山とをみうら弥しなほとゝきす
- 353 つれなしや思ひ捨れとほとゝきす
宮の腰の浦にして
- 352 つれなさを人におしへそほとゝきす
- 351 かみ山のはつ音やたむけ時鳥
- 350 月になけさらは雲ゐのほとゝきす
加茂の山にて
- 349 子規はなにかへたる木のまかな
山踏せし時 高根にのほりて
- 348 曳つれよ土産に都のほとゝきす
出羽国秋田の人上落して興行ニ
- 347 問るへき宿かは嬉しほとゝきす
大坂豊嶋篤宜始て訪来しニ
- 346 世々にきく名もいや高し反魂
祇公墓蹟開
- 345 きかましや今幾日有て時鳥
- 344 老もよしきかしね覚の郭公
- 343 とはゝいつ寐覚むら雨郭公

「 三十六オ

「 三十五オ

「 三十五ウ

- 364 時鳥いつち山中よふことり
山中といふところにて
- 363 行かへれ松有宿のほとゝきす
饞別のあるしする人に替りて
- 362 またるゝやいかに遠山ほとゝきす
- 361 山にてもきかすはいつち杜鵑
- 360 さみたれをまちつゝそふる杜鵑
子規例より遅く五月の末に聞て
山寺の人のもとへ
- 359 さそへ猶婦山路のほとゝきす
おなしく
- 358 ほとゝきす誰をいさめて帰山
帰山にて
- 357 みやこ出て行む空なしほとゝきす
都を出る時
- 356 問とはす手枕疎しほとゝきす
- 355 まつ事のなきにしもあらず反魂
歎生と両吟ニ

「 三十六ウ

「 三十七オ

365 水鷄にもおとろかされよ郭公

366 藤になけ雲の所縁そほととぎす

秀右の月次会始ニ

367 子規言葉の種のはつ音哉

誓円寺月次ニ

368 古せぬや老の耳にもほととぎす

┌ 三十七ウ

江守值孝身まかり給ふ時 独吟ニ

369 しる人のなきや忍音ほととぎす

紹巴百年忌ニ

370 かたれ世をおもふ古声反魂

371 鳴つれて植よ里く田長鳥

菖蒲

372 あやめ草袖引かはすにほひ哉

┌ 三十八オ

373 なかき根は汀床しきあやめ哉

快全法師と両吟

374 袖毎に世の風にはふあやめ哉

若竹

375 若たけは直き久しきみとり哉

376 若たけは我はつ風の戦き哉

377 若たけの風触まほし老の袖

┌ 三十八ウ

378 わかたけはすゝしき風のはしめ哉

379 なよ竹の心も靡く若葉かな

380 露よ風なつさふ竹のわか葉哉

五月雨

381 さみたれに降出る空かあさ曇

382 さみたれはしはし心の晴まかな

383 雲風を空さみたれの行衛かな

┌ 三十九オ

384 しら雲を雨の五月の光かな

385 五月雨はすゝしき空を晴間かな

386 川音の積るや雨の五月山

閏五月

387 雨長しことし更なる五月哉

相やとりせし事侍て

388 さみたれのなかき日かたれ相舎

「三十九ウ

399 月床し名のみもる山夏のかげ

梅雨

389 をのつから木の下露や梅の雨

390 夕月夜ほのめけ匂へ梅のあめ

391 名残とやかほる風吹うめの雨

392 月少しかすめよさらはうめの雨

夏月

393 夏山は月に求し木の問哉

394 夏の夜やあかつきかけて夕月夜

395 影見せよ雲間またるゝ五月山

396 忘れてはまたるゝ空や五月闇

一周忌

397 月も世も見よ短夜の一めぐり

前田直忠身まかり給ふ悼ニ

398 おしめはや短き人の夜はの月

近江路過る時 守山にて

「四十ウ

螢

400 朝露に光おさまるほたる哉

401 吹みたれ吹かふ風のほたる哉

402 影見えて取とぬ風のほたる哉

403 夕露の草葉に戦くほたる哉

404 夕露の光晴とふほたるかな

405 夕露の果はみたるゝほたるかな

406 五月闇いかに契りて飛螢

407 ほたるさへつれて玉とふ泉かな

408 せき入て螢も庭の清水哉

409 うちみたれ篠の隈なき螢哉

410 隈毎の芦のよをしるほたる哉

411 夏草の下はえならぬほたる哉

秀右の許にて三吟

412 刈蔕のみたれて見ゆる螢かな

紙屋川のほとりにて

「四十一ウ

「四十二オ

413 紙屋川つゝみあつむるほたる哉

加州小松重幸なく成し時

414 袖のうへの露に消行ほたる哉

悼人のもとへ

415 行ほたる闇なる空を名残哉

「四十二オ

蟬

416 せみの音に戦く露ちる木陰哉

417 松風のかよふや蟬の下すゝみ

418 蟬の音は来ぬ秋嘗る時雨哉

竹森檢校春林にわかれし悼

419 うつせみの世をことほりて啼音哉

「四十二ウ

常夏

420 苔青き岩の床夏塵もなし

漢和の会ニ

421 なてしこや唐も大和もませの内

孫むすめ出生しける悦ニ

422 撫子のあはれむつまし姫小松

423 うち出る色や一はな石のたけ

妻におくれたる人の許へ

424 名残いかに無床夏の露の袖

「四十三オ

夕顔

425 月しろし誰夕顔そはなの露

426 眉煙り夕顔しろし玉かつら

蓮

427 白露を集めてこほす蓮哉

428 露をおもみ風待あへぬ蓮哉

金沢常徳寺興行

429 下水を恥るはちすのうき葉哉

430 みこもりの下はえならぬ蓮哉

431 しら露もあふぎの色もはちす哉

人の悼に

432 までしはし思ふはちすの上の露

「四十四オ

「四十三ウ

悼

433 あはれ世や消し露をく花はちす

扇

434 取とめぬ風ならなくのあふきかな

435 風は月の中より出るあふき哉

436 絵に書は草木の風のあふき哉

旅行の人のかたへ扇子いたりて

437 思ふ風ゆく急にそふる扇かな

白雨

438 ゆふたちは月に鎮まる雲間哉

439 夕たちや光を洗ふ空の月

440 夕立はかたへすゝしき雲井哉

441 夕立の露やかたへの秋の庭

「四十五オ

納涼

442 山風の色にすゝしき青葉かな

443 すゝしきの底のや千尋さゝれ水

444 松竹はすゝしき庭のけちめ哉

新宅にて

445 すゝしきやしつらひ栽し宿の松

446 すゝしきやこれも北風の窓の風

447 たちはなのほひにすゝむゆふへ哉

448 夕すゝみ友まちえたる木陰かな

449 風かよへ山をみなみの夕すゝみ

450 月を見る心なくてもゆふすゝみ

451 袖に風かほらはとまれゆふすゝみ

452 残れるや甲斐有明の朝すゝみ

453 しら山にむかふや雪の下すゝみ

454 常磐木の時も有けり下すゝみ

政右の許にて月次会始ニ

455 茂れ猶言の葉風の下すゝみ

やことなき人の許より 嬉しき

事あまた有つる謝礼の心はへニ

456 袖にふけあまるか松の下すゝみ

「四十五ウ

四十六オ

457 水景や木すゑに戦下すゝみ

小児を祝する事有家にて

458 生行む小松や世々の下すゝみ

月を待ゆふへや雲の下すゝみ

459 色とのみ思ひし月のしたすゝみ

待宵や心の月のしたすゝみ

六月九日 聖廟御鎮座の日なれば

461 恵みあれや神松の風下涼み

七十に成ける人の新宅にて

462 飯の宿たのしめ松の下涼み

水晴て夕日涼しき川辺哉

463 すゝしさに事みなつきの光哉

春をおしみ秋はまたれて夏もなし

御秋

464 茅の輪をも越るや幾瀬老の波

465 きよき瀬や心の麻のゆふはらへ

466 おもふ事ぬさとり／＼の御秋哉

天神手向

470 松風やとりあへぬ袖の夕秋

471 水上の心に清し御秋川

雑

472 にこる世は仏灌ん水もなし

473 取添て歌もたのしむ早苗哉

474 問よれば隔や名のみかきつはた

475 言種のはなも猶見ん茂かな

476 太山木は雪のかたへのしけりかな

錢別に

477 結びあけあひ見ん道の夏の草

478 夏の日にむへよらけりいとすゝき

479 たけ高しいつれ夏草夏木立

大聖持衆尋来て興行ニ

480 道深く遠く求る夏野哉

481 夏むしの夕景草や今朝の露

482 夏むしの影や行かふ秋の水

┌ 四十七ウ

┌ 四十八オ

┌ 四十八ウ

483 かりの子の花にあそへる水草哉

484 夕ちとり鳴へき夏の川辺かな

485 袖よりも心をひたす泉かな

486 夏草の中なる声や松の風

禪寺にして

487 柏木や爰に木ふかき夏の庭

金沢慈雲寺日祥隠居せし会

488 夏山は木の本住のこゝろ哉

今枝直方の忌中に籠らせ給ふニ

489 ぬれ／＼ていかに日くらす夏の雨

子におくれたる老人のもとへ

490 おくれたる老の心や五月闇

母にはなれたる人のもとへ

491 こゝろさし染しや幾へ夏衣

悼人の許へ

492 花になせ心のうさを忘草

奉捧南无阿陀仏

493 さそふ風頼めすゝしき道の空

山里を訪て

494 山里は夏こそことに木々のかけ

495 音深し木の下露や五月闇

496 夏深し言の葉守の神慮

鏡山にして

497 夏のかげ曇るや花のかゝみ山

奥村惠輝朝臣の許にて

めされし時 加州執柄の家にて

国の人々思ひしたかふ心を

498 松風や人なつくめる夏の陰

加茂の岩本の社の涿にて

499 水清しいはもと柏夏のかげ

北野神前にして

500 いや高しあふく神松夏の陰

六月朔日

501 冬籠けふまち出る氷室かな

陰にもる氷室や同し松の雪

山寺にて雨いたふ降ければ

「四十九オ

「四十九ウ

「五十オ

「五十ウ

503 太山木の下露寒し夏の雨

山代の温泉にて

504 夏山のしたよりしるき出湯哉

袖に待風吹おろせ雲の嶺

「五十一オ

506 しら雪のあやしき嶺や夏の雲

勘解由小路三位殿より

「片月情千里」といふ句を

団扇に御書て下し給ふニ

507 忘れすや風もみなみの都人

六月廿九日 身まかりし人の悼ニ

508 露の世は秋より先のあはれかな

袖にふけいまたこすゑの秋の風

「五十一ウ

510 瀬の声は秋風ちかきゆふへかな

秋風のふりすてちかきゆふへかな

「五十二オ

△表紙▽

聯 玉 集 坤 (書題簽)

「(表紙)

連歌発句 秋部

七月朔日

512 秋といへは月待初るゆふへ哉

七夕

513 月もあれと今夜は星の光かな

514 たなはたのあふ夜まはゆし空の月

515 梶の葉に書言種の露もかな

516 梶の葉の露はかりなる手向哉

「一オ

517 露をとる心はかりや手向種

518 銀川今夜水なき空もかな

519 けふはかり淵瀬にかはれ銀河

520 と絶ともなさまくほしの一夜哉

露

521 見え初つ今朝風露の秋の色

522 しら露やこゝろをそむる秋の色

523 言の葉を千種にそめん露もかな

祇公筆跡開ニ

524 身こそ露きえぬや其名世々の秋

525 新ら露や草木しつらふ秋の庭

526 風露や草木のはしめ秋の色

527 世のうさをなくさむ露の命哉

脇田直賢の身まかり給ふ悼

528 露の世は其言種を名残哉

亡父能舜廟にまいりて

529 露はかり袖に残れるむかし哉

菊地武庸の御許へ悼ニ

530 知ら無や夢露の世を秋の床

川嶋正郷母におくれし時

531 おもふさへいかに其野の露の袖

子におくれたる人のもとへ

532 いかに露くたけて袖の玉まつり

娘におくれし人のかたへ

533 とゝめをく世は露なれや秋の袖

浅井政右の身まかり給ふ悼ニ

534 玉よはふこたへもあたし袖の露

無人の七々日水向ニ

535 露の身のきえて残らむ罪もなし

悼人のもとへ

536 袖しほる外なき露のうき世哉

全

537 たむけせん露の言種色もなし

全

538 袖のうへの露や心のたむけ種

全

539 たくへしな露の思はんうき世哉

全

540 誰袖か露のかくらぬ草の原

「三ッ

「二ッ

霧

541 朝霧の夕へにのほる白根哉

542 秋の色やまた薄霧の朝しめり

543 遠山の鳥啼霧の朝戸かな

544 加州へ始めてくたりし時

545 朝霧やへたてゝも又越のうみ

546 いろ／＼のむら霧靡く木末哉

547 おのか色に霧や吹なす松の風

548 薄濃木すゑは霧の紅葉かな

能登深見か浦にて

549 山高し雲ま霧間の滝津波

おなしく七尾にて

あさ霧に嶋はうかひて波もなし

萩

550 はつ花は一重を千重の小萩哉

551 置まよふ色やしら萩露の庭

552 はなといはゝ萩を桜の千種哉

「四ウ

553 はな散て露も下葉の小萩哉

554 萩散て秋の色付した葉哉

555 萩か枝に露の花待ゆふへ哉

556 折こゝろ遠くにはへる小萩かな

557 おらて見よかことかましき萩の露

558 分し野の家土産もなし萩の庭

於玉川

559 たま川やしきを洗ふ萩か花

560 萩こすは色なる波の尾花哉

561 みたれすは露もかゝらし萩薄

562 萩ちりて薄かうへやあぎのかせ

563 はな薄有つゝいかに萩の庭

虫

564 むしの音に鎮まるさ夜の嵐哉

565 鳴海を過る比

虫の音も波に鳴海の野風哉

素庵居士十三回忌

「五ウ

「五オ

566 松むしの音に恋らるゝむかしかな

「六オ

鹿

567 鹿の音の花に明立野風かな

568 鹿の音や山たち出る夕あらし

569 秋風の鹿の音契るゆふへ哉

570 秋やいつ鹿啼山の夕しくれ

571 しかの音の薄に残る山田かな

572 しかのねや紅葉にまじる山風

573 しかの音に山の色そふゆふへ哉

薄

574 一むらや秋の千種のはなすゝき

575 秋風は薄うち敷ゆふへ哉

576 柳には見ぬ花靡くすゝき哉

577 秋風やうち出る波のはなすゝき

578 庭に入山風ほそきすゝきかな

579 一村に千種も靡く薄かな

「七オ

嵯峨野にして

580 野は枯て薄はかりや秋のかせ

581 風露を只一むらのすゝきかな

582 まねかても問はや宿の花すゝき

583 穂に出ぬ心いふかししのすゝき

584 秋すこし残る枯野の薄かな

585 目にそ立千くさの秋の初尾花

舟岡のほとりの庵にて

586 あき風や裾野の薄岡の松

素庵居士七回忌

587 千ぬ袖や尾はなか本の草の露

荻

588 荻の葉にうつれは替る扇かな

589 荻の葉をこほるゝ露のはしめ哉

590 風露の荻にかたよる夕かな

591 かせ露の荻に諍ふやとり哉

592 荻の葉やつま声つとふ軒の松

「八オ

「七ウ

能通 随弥三吟

発句つかふまつれとのたまへは

593 萩のこゑいつちゆくらん今朝の露

604 たちまじる草の袂も花野哉

594 萩のこゑ露に更行月夜かな

605 花のうへも野分の跡や秋の庭

595 萩にさへ春は忘れん萩のこゑ

606 河内国佐太天神宮法楽

596 いつれ秋萩の上風萩のつゆ

607 神におもふたむけははなの千種哉

597 はつ雁のそなたにむかへ萩のかせ

608 はなのうへに見ゆるや千々の秋の色

598 空に雁かはせる萩のは風哉

609 一本に見るや千種の秋のかせ

能州今浜にて

610 花咲ぬ草葉は露のゆふへ哉

599 はま萩や爰にこたふる奥津波

611 霧たちて海にかさしの花野哉

懐旧

草花

612 色そなきしほるゝ袖のたむけ種

600 移りゆく心も千々の花野哉

「九オ

槿

601 あさ霧の花に成行野風かな

竹内三位惟庸卿へ連哥すゝめて

602 言種のはな世にちらせ秋のかせ

613 朝顔は露の花なるにはひ哉

祇公の忌日の月次の会始ニ

614 祇公忌日月次の会初ニ

603 言種のはなや心の千々の秋

615 朝顔の残るや人の世々の秋

うへのおのこまいりあひしに

忍草

「九ウ

「十オ

聯 玉 集

- 614 しら露やまた秋風のしのふ草
「十ウ
- 615 秋風や又した露のしのふ草
素庵居士の一周忌
- 616 一むらの薄や其名しのふくさ
菊地武包の許へ悼ニ
- 617 袖ぬれて摘るや忍ふくさの露
能舜五十回忌
- 618 老か身や古きかた見のしのふ草
「十一オ
- 葛
- 619 しら露に吹なす風の葛葉哉
- 620 あき風や又うら枯の真葛原
- 月
- 621 夕月夜一葉二葉の木まかな
「十一ウ
- 622 月もれと風のゆふへの一葉哉
- 623 影清し初秋風の空の月
七月十五夜
- 624 照初るひかりや三のあきの月
- 625 月は今朝薄霧靡く光かな
- 626 月そすむ作りさまにも宿の秋
- 627 月は今朝夕闇おしき名残哉
- 628 月出て夕霧しつむ木ま哉
- 629 空に秋まち出し月の光哉
「十二オ
- 於清水寺
- 630 嶺の月滝に落来るひかり哉
- 631 降くらせ月にさはるな秋の雨
- 632 月の為露をく庭のあきの雨
- 633 よしやふれ月は有明宵の雨
於墨吉
- 634 月を置いて春とやいひし秋のうみ
「十二ウ
- 635 白露の木間さやけし夕月夜
嵐山にて
- 636 杉の庵のすきかてにすめ空の月
八月朔日の会ニ
- 637 空に影おもふ八月のはしめかな

- 638 澄にけりかくてそ月の秋の水
天神御影開ニ
」十四オ
- 639 月のうちの木ま添行光哉
山代の温泉にて千句第一ニ
」十三オ
- 640 月は山見よや雲水秋の色
粟か崎にて
- 641 月出て空なる水の光かな
木場といふ所の江のほとりに
たれかれ誘ひ出て 月見し時
- 642 峯の月汀まされるひかり哉
新宅にてせし会ニ
- 643 月をさへしつらひ住か宿の秋
月も今雁まち出る雲井哉
」十三ウ
- 644 前田直忠の許にて 二見か浦を
蒔絵に写したる文台ひらきニ
- 645 影うつす月は玉くしけ二見瀉
老の寐覚に
- 646 行かたへさそへこゝろの空の月
月薄し虫のね疎し老の床
- 648 空澄てやはらく月の光哉
政長朝臣の書院開の御会ニ
」十四オ
- 649 広くすむ宿にこそ見め秋の月
出て此山のかい有あきの月
秋風の月はしくれの雲ま哉
柴屋の文台に書付侍る
- 650 651 652 653 654 655 656 657 658 659 660 661
- 651 秋風の月はしくれの雲ま哉
- 652 しはの屋に見るやむかしの秋の月
- 653 白雲にたちなまたれそ嶺の月
- 654 薄霧にすむ空おもふ月もなし
松原一息の亭にて一円相の額ニ
」十四ウ
- 655 雲はれて是やむなしき空の月
- 656 月よりも雲に風まつ高ね哉
- 657 風ふけは月はれくもる木間哉
- 658 まれに月求め出たる木間哉
- 659 身のうへをおもへはあたら月夜哉
- 660 月は今朝薄霧靡く光かな
- 661 有明にうつりも行か秋の色
」十五オ

662 晨明は老の為なる夜床哉

素庵居士三回忌

663 其秋のそれもはかなし夕月夜

玉泉寺其阿の妹尼に成て

有けるか身まかりぬるを悼て

664 したふ人おとるかす月の行衛哉

友の先達ける悼ニ

665 までしはし死出の山路の月の友

絵に書る女に発句せよといへりければ

666 いたつらに心やうこく水の月

雨の日 むかひに人を来しけるニ

667 雨にもそ問んとおもひし宿の月

千日念仏の座にて

668 むらさきの雲はさはらし胸の月

広沢の池の月ニ

669 池のこゝろ広沢清し秋の月

670 長月の影やはしめて三日の空

671 夜は長し手枕疎し月もかな

「十六オ

672 秋しはし月にいさよふ雲もかな

十六夜

673 出て月空にいさよひの曇かな

二十六夜

674 またて見る月は有明の寐覚哉

二十七夜

675 月もなき秋の色なり萩の声

二十八夜

676 行秋はあかつき月を余波哉

二十九夜

677 聞もよし月なき比の秋の雨

名月

678 月今夜秋を出たる光かな

679 月今夜きよらを尽す光哉

680 月こよひ心へたつる雲もなし

681 晴くもる名や塵ならぬ空の月

682 一年に月待出るこよひかな

「十七オ

「十六ウ

- 683 大かたの秋さへ月の今夜かな
 684 もらせ雲つゝむへき名か秋月
 685 空に月名乗出たる光かな
 686 只一夜かくしもいかに秋の月
 687 今夜先空に光や秋の月
 688 おもへとも今夜はあやし秋の月
 689 叙爵せられし人の御許にして
 689 名に晴て雲井に高し秋月
 690 人こゝろ空なる月の今夜かな
 691 中に生る桂折名や秋の月
 692 迎も身は老けり今夜秋の月
 693 雁か音や今夜の月の都鳥
 694 久かたの中の一木や花さかり
 695 思ひしもいひしも月の今夜哉
 696 祇公二百年忌手向の千句第一ニ
 696 名高しやあふけは空に秋の月
 697 快全 好澄三吟に
 697 只今夜老の僻目の月もなし
 698 今夜にも見さりし月のこよひ哉
 699 月今夜猶見ん積れ老の秋
 700 身のうへにつもれる月の今夜哉
 701 月こよひきらをみかける光かな
 702 月の名のあやしと聞し夕かな
 703 又や見んと思ひし月の今夜かな
 703 寺西秀右と月見しニ 発句
 704 せよとのたまへは「又や見ん」と云し
 704 句せし後 名月の句せしといへと
 704 いはて只思はん月のこよひ哉
 705 雁
 705 先そおもふ秋風ふけは雁の声
 706 雁かねに行くむかふ山路かな
 707 歎るまくらは雁の雲井哉
 708 爰にとて越なん雁のは山かな
 709 まつ雁よ半すすな秋の月
 710 夕月夜はつ雁ちかき雲まかな
 710 雁
 710 夕月夜はつ雁ちかき雲まかな

「十七ウ

「十八オ

「十八ウ

「十九オ

「十九ウ

711 擣そへぬ衣かりかね秋のかせ

越路よりのほりける人を待悦て

712 告て来し初雁嬉し秋のかせ

おなしくのほりし人の興行ニ

713 かたれ雁いかにうみ山越の秋

出て月雁まち顔の高ねかな

714 あさ霧に雁の声待は山かな

雁啼て何あらそはんあきの海

715 夜よしとも告はや雁に秋の風

北野にて万句の内

716 はつ雁のこゝろ高しや雲のうへ

横山正忠身まかり給ふ追悼ニ

717 なれも今鳴かりの世の恨みかな

加州より春林 友雪のほりしニ

718 つれて雁越路かたらふ都かな

雁か音や空に越路の秋の色

越中高岡より直倫 周方訪来しニ

722 遠く来て音信うれし天津雁

能州七尾にて

723 此浦に雁も来にける落かな

都をおもひ出て

724 雁に秋告やる風のたよりかな

快全 好澄三吟ニ

725 身にもなせ草木の老は秋の色

菊

726 しらさくのあまれる色や今朝の霜

折かたやあた波立ぬ菊の淵

727 菊に良うつろふはなの籬かな

九月八日ニ

728 盛なるけふや限なき菊の色

植置し心や色香宿のきく

729 河内国佐太天満宮法楽の連歌

永井伊賀守直敬朝臣の御作代

730 行衛見む根ふかく栽し宿の菊

元禄十四巳天七月廿九日は

元禄十四巳天七月廿九日は

祇公二百年忌手向の千句ニ

732 世々に経る玉の光や菊の露

しはし時うしなはせ給ふ人の許にて

733 うつろふや盛にかへるきくの霜

柴屋の形に菊を画る

文台ひらきニ

734 見ぬ世にもつたへて菊の句かな

川嶋正郷新宅の会ニ

735 心はへうへしうへけり宿のきく

736 化ものゝためしやかへて菊の露

十三夜

737 見つゝ月おもひくらふる今夜かな

738 半をもおしまさりきや秋の月

739 かさなりて其名も長し秋の月

740 我國の物や今夜の秋の月

741 まさらすは後の名たゝし秋の月

742 菊もみち月の色そふ今夜かな

743 望月に光あらそふ今夜かな

744 あかつきのわかれば月の今夜哉

十三夜の月見んとて 飲生

かたへまかりしに 発句せよと

たれかれいへりければ 去ぬる

十五夜にせし句なから いさゝ

か心もかはり侍るかとして

745 又や見んと思ひし月の今夜かな

紅葉

746 影すむや木間の月の下もみち

747 遠山や爰に木間のむら紅葉

平岡といふ所の道すから

748 ゆく山路暮なはてらせ下紅葉

749 照月もともに木末のもみち哉

750 霜にとて残すや露のむら栂

日吉のやしろにて

751 おしなへて影は日吉のもみち哉

「 二十三ノ

「 二十三ノ

「 二十三ノ

「 二十四ノ

聯 玉 集

752 紅葉ちり有明薄し秋の色

753 且散や庭に木末のむら栂

754 頭れぬ又もみちにもはつ桜

755 秋は猶有とや爰に遅もみち

北野桜葉の宮の月次ニ

756 さくら葉の宮井ほのめく栂哉

757 紅葉にも心見えけり家さくら

758 染くし色も紅葉の遅さくら

山里にて

759 もみち葉も入にしたかふ山路かな

嵐山にして

760 川水や嵐の山のしたもみち

761 月出て山のかい有もみち哉

762 一もとに秋のいさよふもみち哉

浅間山を見て

763 煙るてふ紅葉やこかるあさま山

764 栂葉に跡まで見ゆるしくれ哉

「二十五オ

766 紅葉さへ菊に匂へる山路かな

於鈴鹿川にて

767 すゝか川八十瀬の波やむら紅葉

暮 秋

768 心ゆく秋のかきりのゆふへ哉

769 行秋や奥有明のさ夜しくれ

千句之内

770 一日たに暮はななめつ秋の空

生駒重信の庭に竹深く水流るに

771 行秋や竹にこもれる水の声

半田正祖の飛州へまかり

772 秋そ行よしさは待ん春の空

給ふ餞別に

雑

773 松高き風の気色や四方の秋

774 山窓をひらき出るや四方の秋

「二十六オ

「二十五ウ

775 身にそしむ見ぬ色深し秋の風

七月朔日 北野の森に子規の

啼をきゝて

776 たちかへり秋やはつねのほとゝきす

「二十六ウ

月影のうへに書付侍る

777 いなつまのうつし置るや露の影

778 山はあれと花よ紅葉よ野への秋

岡嶋元為の御許にて 梶の葉に

筆を蒔絵にしたる文台開ニ

779 言の葉の色そふ筆の林かな

780 言の葉の千種に染む露も哉

781 取添て紅葉に菊の籬かな

「二十七オ

柴屋の文台開ニ

782 色にさへなら柴の屋のしくれ哉

祇公墓蹟開ニ

783 ことの葉の千しほや染し筆の跡

北野に閑居しつらひ住けるに

快全 好澄に問れて三吟ニ

784 色に出てとはるゝ宿の木末哉

785 花に秋尽さぬ草のみち哉

786 松の葉をもとかしけ也蔦もみち

天神御影開ニ

787 松高し是そ神世の秋色

788 苔青き爰や木すゑの秋の色

789 秋の野にはしめて青し小松原

790 山の秋つかねて帰る小柴かな

左中弁なる学ひする人の御許にて

791 さま／＼の色やあつまる窓の秋

「二十八オ

大井河にて

792 山／＼やうつりて秋の大井川

祇公の発句 宗長筆跡開ニ

793 霜を経て猶言種の千入哉

794 うつら啼野への笹原色もなし

795 鵲啼て秋の木末の夕かな

796 きり／＼すかたらひ明す夜床哉

797 まで嵐川霧白し今朝の月

「二十八ウ

菊地武包の江戸へ下り給ふ餞別ニ

798 むさし野の秋を心の行衛かな

七月七日 北野御手洗の神事ニ

799 あふきてもけにみたらしや天川

800 菊もみちいつれかいつれおもひ草

801 置やらて暮待ならず扇かな

帰山にて

802 誰為の秋のにしきそ帰山

光高卿の御簾中かくれます時

803 誰袖も秋の草木のしくれ哉

804 これや又秋のはつかせ夕時雨

805 跡もなき思ひや秋のさ夜しくれ

806 よそに擣衣かさぬる夜寒かな

807 遠山や葉越に見えて松の秋

亡父能舜十七回忌

808 有し世の秋や其名をかたみ草

初秋七日 北野みたらしの神事ニ

809 をのつから涼しく清し秋の水

於大沢の池

810 絶たるをつくや秋風瀧の音

北野松梅院尚禅の悼

811 いなつまの露をとむむる袂かな

津田正忠の三十三回忌

812 うかりけり是やむかしを今の秋

半田正祖の許にて 長柄の

813 橋を詩絵にしたる古き文台開ニ

古き風吹やなからの橋の秋

亡父能舜二十五回忌

814 覚るやはうしと見し世の秋の夢

浅井政右の悼

815 馴し世や恨にかへる老の秋

教順か悼ニ

816 しのはしよ残るそ恨み老の秋

悼ニ

817 色そなきしはるゝ袖の手向種

雨の日訪来し人に

818 雨にとふ心そこゝる秋の宿

七月九日 津田孟昭の下屋敷の

蓮池にあそひて

819 秋かけて夏の日永きはちす哉

本多政敏朝臣の山中の温泉へ

入湯おはしましゝ時

820 秋さむみ出湯は神の恵み哉

おなし御時

821 こかるゝやかけも出湯の下もみち

家相統すへき人の祝言に

822 吹そふや松に千秋の家の風

撰州住吉の社法楽

823 すみよしや神代の秋も松の風

一とせあつまへくたりける比

824 たつた姫及ぬ色かふしの雪

おなし時

825 松陰や秋なき波の清見瀉

越中立山を遙に見て

826 秋の色目にたち山や雲の上

一とせ能州一見にめぐりし時

一言にて手向

827 松杉や神の太山木世々の秋

阿部屋の浦

828 松原の秋や塩屋のゆふ烟

福浦の磯

829 秋風や音に入ぬる磯の松

深見か浦

830 立田姫おしむか染ぬ瀧の糸

黒崎の磯

831 秋風の波の荒磯岩もなし

惣持寺

832 夕くれや秋より外の深山寺

(書入れ)
老本即興と題して此処に添へたり

832 A 秋のいろを束て帰る真柴哉

「又三十二オ

「三十二オ

冬部

初冬

833 梅咲てにほふ春日や神無月

834 春の日の暮安きをや神無月

大坂にて

835 難波津や今も春への神無月

836 薄雪や春のはつはなみな月

837 神無月さてしも今朝の時雨哉

時雨

838 夕暮の冬も来にける時雨哉

839 明る待寐覚はつかしさ夜しくれ

840 こきませに時雨木葉の夕日かな

841 月を見て時雨音きく寐覚哉

842 ゆく月のくもりみ晴み時雨かな

843 月の色は照も曇るも時雨かな

┌ 三十三ウ

┌ 三十三オ

むさし野にて

844 武蔵野やふらぬ日あらし村時雨

浅間山にて

845 遠近に見ぬやあさまのはつ時雨

846 松風や爰にしくれの相やとり

847 思はすの人も宿とふしくれ哉

848 しくれすはいたつらならん寐覚哉

849 しくるなよ起ふし苦し老の床

柴屋文台開ニ

850 其詠めいかにしはやの夕時雨

衣笠山にて

851 ぬれてはず衣笠山のしくれ哉

大井川にて

852 川波にしくれ木葉の行衛かな

853 雪ちかし山や木からしゆふしくれ

永原孝治の身まかり給ふ悼

854 晨明の影はむなしきしくれ哉

横山氏従の身まかり給ふ悼

┌ 三十四ウ

┌ 三十四オ

855 残されてぬるゝ時雨の朽葉かな

落葉

856 月出て今心ある落葉かな

857 さそふなよ散とも風の下紅葉

黄門利常卿薨し給ひし時

858 落葉して下にかくれぬ嘆哉

859 小夜更て霜に鎮まる木葉哉

860 散にけり紅葉や霜のはなの庭

山寺へ詣ける比

861 木葉のみ塵とは見えす寺の庭

京にて慈母身まかりしにも

えあはず 小松にて

┌ 三十五ウ

862 はゝ木ゝのあはてむなしき落葉哉

木 枯

863 木からしの□して松の嵐かな

864 木からしの月に晴ゆく木末かな

865 木枯にいかにかくれて下紅葉

田籠の浦にて

866 木からしの只吹田子の浦の松

867 松風になりて木からし跡もなし

┌ 三十六オ

冬 枯

868 枯にけり枯てそ霜のはな薄

869 霜に見よ枯すは秋の村薄

870 冬枯の色にかた寄すゝきかな

871 いはておもふ心の色の冬木かな

正的 直景三吟

872 霜枯の霜にかゝれる草葉哉

近江路にて

┌ 三十六ウ

873 冬枯を老その森のすかた哉

三条西殿かくれますます時

874 いへはえに言の葉枯る歎き哉

懐旧ニ

875 松はかり今は見る世の枯野哉

霜

876 朝日影にほふや霜のはな曇

877 朝霜の花に鳥啼墻根哉

878 月影や氷で残る今朝の霜

879 戦け猶竹のはたれの今朝の霜

880 松風やあかつきつくる霜の庭

881 寐覚してそれより長き霜夜かな

882 はつ霜の花にゝほへる木すゑかな

883 花咲りまして常磐木霜の松

884 霜におき月にすむ夜の嵐かな

885 夕霜の木すゑは今朝の落葉哉

886 ゆふ霜を一ふし柴の枯葉哉

怀旧ニ

887 年を経るしるし木深し霜の松

全

888 霜や名残其世の野への夕烟

┌ 三十七オ

889 笹の葉のあられをこほす霰かな

890 音に見て色に軒端の霰かな

891 あられにも諺ふならの枯葉かな

892 高島定連の息うしなひし悼ニ

袖のうへに見しやはかなき玉あられ

氷

893 吹や嵐汀の水奥津なみ

894 ゆく嵐跡を汀のこほりかな

雪

895 はつ雪はまた山窓の木間かな

896 はつ雪に見ぬ山ちかき朝戸哉

897 はつ雪を松一むらの枯野哉

898 薄雪の今朝はもみちぬ松の色

899 松風のしくれてつもる今朝の雪

900 神松に降初し雪やたむけ種

901 思ひ来し風の行衛や今朝の雪

┌ 三十八ウ

┌ 三十九オ

霰

902 春秋の木末やうつむ今朝の雪
 903 また来し遠山幾重今朝の雪
 904 松は今朝見ゆらむ物を宿の雪
 905 松を置いて今朝こそ庭に嶺の雪
 帰山にて
 906 雲や今朝雪降置てかへる山
 907 有明の光や幾へ今朝の雪
 908 有明やいく夜積りて今朝の雪
 909 雪は今朝明るに晴る高根哉
 910 さ夜嵐おとろく雪の朝戸哉
 911 吹くれぬ明日のはつ雪松のかせ
 912 しくれより雪にも梢の枯葉哉
 913 雪や待つれなき梢の枯葉哉
 914 薄雪の月に澄行ゆふへかな
 915 雪晴て月を添たるゆふへ哉
 916 月に雪おなし雲井の高根哉
 917 花紅葉皆月雪のひかり哉
 918 明ほのゝ白きかきりや月と雪

「三十九ウ」

919 月と雪いつれ／＼のひかりかな
 920 雪晴て月に雁鳴雲井かな
 921 月雪に雁啼空は秋もなし
 三条西殿時うしなひて籠らせ
 給ふつれ／＼に独吟の連歌を御
 覽せまほしくのたまはするに
 922 埋れて猶木高しや雪の松
 923 雪にとて栽しになりぬ宿の松
 924 告すとも問はや宿の雪の松
 925 降にきと告しやかくて宿の雪
 926 松のかせ雪にこほれて音もなし
 奥村有輝の許にて
 927 見るまゝに高く木深し雪の松
 928 松を見て人こそ来ませ宿の雪
 929 薄雪に晴行松のあらしかな
 930 雪の中の松吹出るあらしかな
 931 松は雪に猶あらはるゝ木すゑ哉
 家督せられし人の許にて

「四十一オ」

「四十ウ」

- 932 つきて降雪いや高し宿の松
 しかの浦にて
 うら崎や汀まされる雪の松
 荒乳山にて
- 933
- 934 嶺高しおろす雪吹のあらち山
 雨風の色の積りや嶺の雪
 月は入ぬ俤にして峯の雪
 神前にて
- 935
- 936
- 937 小松生ぬ雪にみそなへ神の庭
 山はれて雪にかたつくみそれかな
 都にて加州の事を思ひ出て
 雪といへは先おもはるゝしら根哉
 柴屋の文台開ニ
- 938
- 939
- 940 しはの屋に跡はとまりぬ雪の道
 うつもれて鳥鳴雪の墻根哉
 薬湯に行て
- 941
- 942 をのつから山里ひたり雪の庭
 山の皆うつるや音に窓の雪
 四十二ウ
- 943
- 944 雪までと色に残さぬ木す彘哉
 春秋のゆき／＼つもる木す彘哉
 雪の色にうつれば替る木す彘哉
 南昌院殿十三回忌
- 945
- 946
- 947 あは雪のあはれ木深しうなひ松
 悼人のもとへ
 したへとも老はおくれつ雪の道
 悼
 死出の山雪にはうつむ道もかな
 友の訪来しニ
- 948
- 949
- 950 しのき来し心深しや雪の友
 音つもる夜のあられや今朝の雪
 雪の底に鳥鳴竹のかきね哉
 友の尋来しニ
- 951
- 952
- 953 待えしや言の葉積る雪の友
 猶問ん跡つけ初し宿の雪
 西三条殿七十八にして
 男子まうけ給ふ祝言ニ
- 954
- 955
- 四十三ウ

955 雪に生て春待千世のみとり哉

都よりとくのほれと人々

いひおこせけるニ

956 雪深し春を待見よ帰山

957 おもひつゝ越路おとろく深雪哉

なやみおもく成もて来て

今はの折から都の事思ひ出て

958 九重に雪の八重山越路かな

寒 梅

959 春を遠み床しき梅のにほひかな

人の閑居につはしける

960 かたらひて冬籠れるや窓のうめ

961 冬籠堪すやほす多梅のはな

本多政敏朝臣の亭にて

梅か枝を蒔絵しける文台開ニ

962 梅か枝は花の常繁か冬の陰

年内立春

963 行と来と先あふ春や年の内

964 ゆくと来と年のあらそふ今宵哉

元禄十三年臘月廿五日

上皇老折の身を憐み思召て

梅花硯といふ御硯に綿二屯

賜る 翌廿六日立春なりければ

965 年のうちの春日かしこき光かな

歳 暮

966 身にそおもふ残すくなき年の暮

967 年を捨てまたれんととも老の春

968 氷れるやかへる春待老のなみ

969 春をまで老なおもひそ年のくれ

970 身に高く雪つむ年の余波かな

常徳寺賞山法師の悼

971 無人の身に先暮しことしかな

972 おしむとてしはしいさよふ年もかな

「 四十四オ

「 四十四ウ

「 四十五ウ

「 四十五オ

「 四十六オ

973 岸法能拝先達し悼
覚ぬまに年さへ夢の行衛かな

横山氏従の亭にて

974 身の外に行はおしまん年もなし
975 身を置いて思ふさへおしとしのくれ

雑

976 松風や時雨降置る今朝の霜

近江路にて

977 しのはらや風のあさ霜ゆふしくれ
978 雪しくれ山見かくれの夕日かな
979 雪そおもふしくれあられの夕あらし
980 空晴て松より出る雪吹かな

芦に雁を画る屏風に

981 ゐる雁のこゝろも雪の芦へかな
982 雪戦き竹葉露けきみそれ哉

孫の五千丸髪置の祝詞

983 雪霜をいたゝきまつれ神の庭

984 深みとり松にあつまる冬野哉

古き社に詣て

985 音すみて松風さむし神の庭

きた山にて人々酒など酌て

986 酔の後ねふれる山のすかた哉

987 川波に夜の声すむちとりかな

988 河波のこゑく寒し夕ちとり

妻におくれし人のもとへ

989 妻なしのそれも鶯鳴夜床かな

990 水すみて木末限なし冬の月

991 埋火の空ふく小夜のあらし哉

小松にての千句巻軸ニ

992 柳葉の声さへすむや神慮

宝永三丙戌年十一月廿八日の夕

行年七十九にして終に臨る時

993 彼国にまち迎ふるや花の春

孫の五千丸髪置の祝詞

983 雪霜をいたゝきまつれ神の庭

「四十六ウ

「四十七オ

「四十七ウ

「四十八オ

「四十八ウ

〔訓点は筆者〕

頃^{ルニ}閱^ニ觀^ル明^軒叟^往日^之唸^句節^序宮^室慶^賀祖^餞弔^悼至^ニ于^三題^物賦^景無^シ曾^テ不^ル彈^丸矣^一。叟^ハ連^歌之^翹楚^也。故^ニ隱^德深^潛樂^シ老^ヲ於^ニ朔^方之^海浜^ニ揚^ニ譽^ヲ。〔四十九才〕高^聞辱^露於^ニ姑^射之^靈液^ニ。余^波流^シ風^ヲ自^薄四方^ニ者^一不^レ爲^レ少^ト矣^一。與^下夫^障百^川而^東之^廻狂^瀾於^ニ既^倒者^上孰^能相^頡頏^哉。叟^毎云^フ吾^無遺^{〔四十九才〕稿}平^素所^レ聯^儻幸^有後^世膾^炙人^口豈^ニ其^舍諸^ト。茲^歲門^人歛^生有^レ志^一輯^ニ其^句爰^職所^レ聞^又于^ニ鄉^里于^ニ都^鄙訪^一問^シ搜^一求^ニ句^粗垂^{トス}千^披册^誦之^如面^{〔五十才〕}見^{シテ}叟^一而^親誨^上焉^非嗜^ニ連^歌者^一之^標的^上乎^可謂^下其^用心^勞成^レ功^大矣^一。

宝永丁亥晚夏下浣、能美小松原松維忠
跋

能順交遊人名索引(稿)

○洋数字は本『聯玉集』の句番号を示す。

○漢数字は『能順天和三年より発句書留』(国文学研究資料館紀要 11号所載の「加能連歌壇史藁草・その二(前)」中に

に翻刻)の句番号を示す。

○『白山万句——資料と研究——』中の関連記事所出ページを「万P」と示す。

○前出「加能連歌壇史藁草・その二(前)」中の関連記事所出ページを「藁P」と示す。

○標出の仕方も、便宜上附したごく簡単な説明の書き方も、ともに未整理のまま取める。

章重 あきしげ 271 『俳諧北之箱』所出の章重と同一人歟

(小松山王祠堂・藤村左太夫歟)

石河正謙 いしかわまさかね 一六・一八

(「平岡之山庄更幽軒」・「北野之家」)

浅井政右 あさいまさすけ 140・321・455・534・566・587・616・663

井上長貞 いのうえながさだ 206

(未詳)

・815・7・11・19・31・55・69・70・71 万P 497・万P 499・万P 502・万P 505・藁P 220

板津正的 いたづしょうてき 282・872 万P 286 (藁P 207)・万P 483・万P 485 (藁P 214)・万P 486

(「夜話衆・板津検校巽」)

阿部正勝 あべまさかつ 218

板津直景 いたづなおかげ 217・872・五八

(「夜話衆・板津検校巽」)

有馬涼及 ありまりようきゅう 一七

(未詳)

生駒重信 いこましげのぶ 771

藁P 232

(生駒万兵衛、排名・万子歟)

(「正の子。本多家臣。久七郎、後朴水」)

板津直頼 いたづなおより 万P 472

(板津正の先代)

今枝近義 いまえだちかよし 薬P 251 (能順より源語受講)

今枝直方 いまえだなおかた 489・一〇・四六 薬P 253 (通名民部、号信斎。一万四千石)

内大臣 うちのおほいまうちきみ 329 (信斎養子。通名内記。人持組頭)

江守直孝 えもりあきたか 369 万P 485 (薬P 214)

大森好澄 おおもりよしずみ 205・697・725・784 万P 493 (通名寛左衛門、号是磨。人持組、千石)

大森好治 おおもりよしはる 一五・三四・三七・四〇・四二・四三 万P 493・万P 524 (三郎兵衛好治の子歟)

岡島元為 おかじまもととなり 779 薬P 232 (通名備中。人持組、五千石。小松御城番)

奥村有輝 おくむらありてる 257・927 (奥村氏宗家の第六代。時成の三男。従五位下伊予守叙任)

奥村應輝 おくむらやすてる 498 薬P 254 (奥村氏支家の第三代。庸礼の嫡子。従五位下丹波守叙任)

快全 かいぜん 374・697・725・784 万P 525 (元故)・薬P 217 (元故)・薬P 226 (元胡)・薬P 229 (快全)

(喜多村屋二代目彦左衛門、剃髪して恵乗坊。一名石良)

勘解由小路三位韶光 かでのこうじさんみあきみつ 506

周方 かねかた 722

狩野縫殿助 かのうぬいどのすけ 二二三 (越中高岡より。直倫と同道)

歎生 かんせい 59・220・239・356・745・六 (未詳)

川島正郷 かわしままささと 531・735 (未詳)

菊池武包 きくちたけかね 617・798 万P 517 薬P 220 (通名源兵衛、大学。武庸の嗣。大小将、三千石)

菊池武庸 きくちたけつね 530 薬P 220 (通名十六郎。実は浅井政右弟、菊池大学是空の養子。世子吉徳の傳。退老して号秋厓)

桔梗屋七左衛門正信 ききょうやしちざえもんまさのぶ 一四 (六右衛門正治の弟歟)

桔梗屋六右衛門正治 ききょうやろくえもんまさはる 二二 万P 493

菊屋理右衛門直之 きくやりえもんなおゆき 二二二 (加賀藩京都呉服所御用。「岡崎之家」)

教順 きょうじゆん 816 万P 525・万P 539 (能順はじめの養子。貞享元年歿)

行誓 ぎょうせい 一三

(西本願寺下・勝満寺)

玉泉寺／其阿 ぎょくせんじ／ごあ 664・二四 万P 517

「一六拾石 外拾武石 御祈禱連歌月次料」

(金沢泉野拝領地・時宗)

踞道 きょうどう ↓ 横山氏従 よこやまうじより

九津屋次郎右衛門了武 くつやじろうえもん 八 万P 475

慶阿 けいあ 薬P 248 (久津屋・沓屋とも) (小松・魚問屋)

元故・元胡 げんこ ↓ 快全 かいぜん

元流 げんりゅう 万P 502

元林 げんりん 万P 486 (薬P 203) (快全の父)

其阿 ごあ ↓ 玉泉寺／其阿 ぎょくせんじ (竹森檢校春林の師歟)

五千丸 ごちまる 983

坂倉助太夫・息善助 さくらすけだゆう・ぜんすけ 八一

(能順孫) (未詳)

佐藤儀左衛門 さとうぎざえもん

(能順養子瑞順の父。馬廻組、三百石)

佐藤治兵衛 さとうじへえ 五三 (未詳)

左中弁なる学ひする人 さちゅうべんなる 791

三条西殿 さんじょうにしどの 874・922・955

慈雲寺／日祥 じうんじ／にっしょう 488・五六・七九 薬

P 229

重俊 しげとし 万P 476 (薬P 197)・万P 479 (薬P 200)・万

P 487

重政 しげまさ 万P 476 (薬P 197)・万P 479 (薬P 200)・万

P 487 (小松の人歟。未詳)

重幸 しげゆき 417 万P 476 (薬P 197)・万P 479 (薬P 200)

万P 487 (小松の人歟。未詳)

春林 しゅんりん ↓ 竹森檢校／春林 たけもりけんぎょう

常徳寺／賞山 じょうとくじ／しょうざん 429・971 万P 476

(薬P 197)・万P 479 (薬P 200) (小松の人。未詳)

〔貞享二年社由緒書上〕に「頓乘法師小松常徳寺

居住之時分」とあり。金沢泉野寺町東方浄土真宗

松梅院／尚禅 しょうばいいん／しょうぜん 324・811

瑞順 ずいじゅん 307 薬P 223・薬P 232・薬P 248

(北野社祠堂)

随珎 ずいちん 593 (能順伝資料・その四・宗因点『延宝五年仲秋

野三吟連歌』に出座。北野宮仕)

誓円寺 せいえんじ 221・368

(小松・浄土宗。能順以下梅林院代々の墓あり)

清山大姉 せいざんたいし 862・八三

(能順母、浄室清山大姉。元禄四年十月五日歿)

素庵居士 そあんこじ ↓ 浅井政右 あさいまさすけ

惣持寺 そうじじ 832

大聖持衆 たいしょうじしゅう 480

高島定連 たかばたけさだつら 892 藁P 232

竹内三位／惟庸 たけうちさんみ／これやす 602

竹田忠張 たけだただはる 60 万P 517 藁P 257

(通名五郎左衛門。人持組・火消役 三千五百三拾石)

竹森檢校／春林 たけもりけんぎょう／しゅんりん 419・720

万P 487

津田孟昭 つだたけあきら 819 藁P 259

(通名玄蕃。人持組、火消役、八千石。俳名・長緒歟)

津田正忠 つだまさただ 812

(孟昭の祖父)

寺西秀右 てらにしひですけ 112・367・412・704

(通名十左衛門。小松町奉行、五百石)

利常卿 としつねきょう 858

豊島篤宜 とよしまあつよし 347

直忠 ↓ 前田直忠 (大阪の人。未詳)

直倫 なおひと 722

(越中高岡より、周方と同道)

永井伊賀守直敬 ながいいがのかみなおたか 731

中里(黒)六左衛門 なかぐろろくざえもん 八〇

(御廻組、千五百石)

長瀬善右衛門 ながせぜんえもん 六一

(御作事奉行より小松町奉行、千石)

長瀬湍兵衛 ながせたんべえ 五一

(加州郡奉行。梅林院二代・瑞順の次兄)

永原孝治 ながはらたかはる 854

・万P 479 (藁P 200) 万P 467・万P 476 (藁P 197)

(通名、初め右京、後土佐。父は赤座吉宗。七千石)

南桂上人 なんけいしょうにん 186

(玉泉寺隠居)

南昌院 なんしょういん 947

日祥 にっしょう ↓ 慈雲寺／日祥 じゅうんじ

能在 のうざい 一二 (能順より先任の北野宮仕)

能作 のうさく 二三 (能順の子。北野宮仕)

能舜 のうしゅん 529・618・808・814・二八

(能順の父。北野宮仕)

能通 のうつう 593 能順伝資料・その四・宗因点『延宝五年

能拜 のうはい 973 仲秋北野三吟連歌』に出席。北野宮仕)

能美屋 「一茂 のうみや」 「かずしげ 四八
(北野宮仕。能順の七歳弟。元禄4年12月6日歿)

野村重威 のむらしげたけ 54・295
(宇孟固、通名勘兵衛。父重徳は大近習組首、千六

林助左衛門 はやしすけざえもん 八二 (未詳)
はる 61 (金沢の女。未詳)

半田正祖 はんだまさおや 772・813 薬P 233
(正智の子歿)

半田正智 はんだまさとも 六四
(通名五郎左衛門。聞番・会所奉行・御小将番頭、

彦山座主 ひこさんざす 67
九百五拾石)

土方雄忠 ひじかたかつただ 185・263
ひじかたかつただ (能登の土方一族歿)

菱屋庄兵衛重直 ひしやしうべいしげなお 二〇・三六
方P 493

(京都呉服所御用・京藩邸「地主」・三宅庄兵衛と
同一人)

本多政在 ほんだまさあり ↓ 本多政敏 ほんだまさとし

本多政敏 ほんだまさとし 53・820・821・962・五〇・七七

万P 539

(本多氏の第三代。政長の嫡男。初諱政良・政在。
従五位下安房守叙任)

本多政長 ほんだまさなが 284・649・九・四九・六三 万P
480 (薬P 200)・万P 485・薬P 539

(本多氏の第二代。政重の四子。母は西洞院時直の
女。従五位下安房守叙任。退休後、素立軒)

前田知頼 まえだともより 165・五四 万P 517
(通名万之助・修理。人持組、貳千石)

前田直忠 まえだなおただ 140・398・645・一一 薬P 226
(能順・政右と雅交深し。前田一門歿)

牧屋久兵衛正 まきやきゅうべえまさ 「四七(未詳)
政右 まさすけ ↓ 浅井政右

正及 まさちか ↓ 由比孫兵衛正及 ゆひまごべえ
正供 まさとも 一一 万P 517・万P 525

(能順伝資料・その四
宗因点『延宝五年仲秋 北野三吟連歌』参照)

松田助左衛門 まつたすけざえもん 六八 (未詳)
松原一息 まつばらかつのぶ 196・655

(『聯玉集』跋者・松原維忠との関係未詳)
水島苗雅 みづしまみつまさ 薬P 247

(通名右近。金沢神明宮の神主から、庭臣庭田重条に仕
え、享保四年に藩士、三十人扶持。綱紀の求書に与る)

光高卿の御廉中 みつたかきよののれんちゅう 803

三宅正兵衛 みやけしようべえ ↓ 菱屋庄兵衛 ひしや

宮丸屋成正 みやまるやしげまさ 六二

素久 もとひさ 三五 (小松・絹商人歟。未詳)

山崎長質 やまさきながただ 264

(加賀藩京都御用町人歟。未詳)

友雪 ゆうせつ 720

(通名庄兵衛。人持組。二千五百石)

湯原応信 ゆはらまさのぶ 五七・六七・七八 薬P 220

(竹森檢校春林と同道上京)

由比孫兵衛正及 ゆひまごべえまさちか 二 薬P 220

(通名源七郎。織部組番頭、千六百石)

養福院/祐尚 ようふくいん/ゆうしょう 175

(御小姓組頭、三百石に至る勘兵衛昌清の初名か)

横山氏從 よこやまうじより 285・855・974・五二・七三

(小松愛宕・真言宗。慶長頃の五代目住持は空照)

横山左衛門 よこやまさえもん 万P 506・万P 508・万P 511

万P 514

(通名内記。号踞道。人持組・用人役、四千石)

(横山氏の第三代忠次。康玄の嫡男。号如心)

横山主殿 よこやまどのも 万P 533

(横山内記二男・言知)

横山内記知清 よこやまないきともきよ 万P 480 (薬P 200)

・万P 488・万P 528・万P 530・万P 533・万P 536

横山玄位 よこやまはるひら 万P 517

(横山氏の第四代。忠次の二男)

横山正忠 よこやまさただ 719

(僧歟。京都住)

龍海 りゅうかい 一

脇田直賢 わきたなおかた 528 万P 479 (薬P 200)・薬P 264

「脇田如鉄家伝記」万P 450 (通名九兵衛。号如鉄)

脇田直能 薬P 264

(通名九兵衛(直賢の子))

渡部宗堅 わたなべむねかた 四二

(加賀藩京都御用町人歟)